

本資料及び資料に含まれる第三者著作物を再使用する場合、
利用者は、それぞれの著作権者より使用許諾を得なくてはなりません。

思索と言語

言葉を科学する：人間の再発見

奥 聡

Day 01

1. Introduction : 科学的にやるとは？

- (1) 最近の若者のことばは乱れている (?)
- (2) a. 急いけど間にあわなかった。試合の最後も見れなかった。
(Cf. 見られなかった)
b. お腹の調子が悪くて、あんまり食べれないな。
(Cf. 食べられない)
- (3) 「ら」抜きことば
 - a. できるだけ「ら」抜けにならないように気をつけるべき
 - b. 「ら」抜けでもかまわない。気にする必要はない
 - c. どちらともいえない
- (4) 「～すべき」「～べきではない」
規範的態度 (prescriptive)
- (5) 記述的態度 (descriptive)
事実はどうなっているか。(できるだけ) 価値判断抜きに事実を観察・記述する
- (6) 「ら」抜きことばの原因
不注意、だらしない？
- (7) 「ら」がいつでも抜けるわけではない
 - a. *盗み食いをしていることを、妹に見れた。(Cf. 妹に見られた)
 - b. *残しておいたピザが、全部、弟に食べれた。(Cf. 弟に食べられた)
- (8) (2)の「られ」は「ら抜き」が起こりやすいが、(7)の「られ」は「ら抜き」が起こらない(「ら」を抜くと文がものすごく不自然になる)。両者の違いは？
- (9) a. (2)の「られ」は「可能」の意味を担う
b. (7)の「られ」は「受身」の意味を担う
- (10) 記述的一般化 (descriptive generalization)
 - a. 可能の「られ」は「ら抜き」が起こりやすい
 - b. 受身の「られ」は「ら抜き」が起こらない(起こりづらい?)
- (11) 事実を確認し、一般化を導く
 - a. 観察
 - b. 実験

- (12) ここまでで、ある種の「実験」が行われた。どの部分か？
- (13) 「実験」
理論や仮説が正しいかどうかを人為的に一定の条件を設定してためし、確かめてみること（「広辞苑」）
- (14) 仮説：
「られ」はその種類（意味機能の違い）によって、くだけた話し方でも、「ら抜け」が起こるものと起こらないものがある
- (15) 人為的に一定の条件を設定：
いくら実際に使われている言語事実をたくさん丁寧に「観察」しても、(7)のような「ら抜け」文は出てこない。（たまたま、そのような例が見つからないのか、ある種の「ら抜け」はできないのか、事実観察だけでは確認できない）
=>(7)のような実際には存在しない文を人為的につくって、日本語母語話者にとってそれが可能な文か、不自然な文かを確かめる（日本語母語話者の無意識の言語知識を利用）=>実験
- (16) 「ら抜き」はすべきではない、正しく話すべきだ、という「規範的な態度」でいると、(7)のような実験も思い浮かず、(10)のような記述的な一般化を見過ごしてしまう恐れが大。
- (17) 言葉に対する「規範的な態度」は「科学的言語研究」にとって大敵
- (18) 次の問題：記述的な一般化が得られたら、なぜそのようになっているかの「説明」を目指す
- a. 可能の「られ」は「ら抜き」が起こりやすい
 - b. 受身の「られ」は「ら抜き」が起こらない
- (19) 考え方1
「見られる」「食べられる」などは、同一形で二つの異なる意味機能（「可能」と「受身」）を担っている。「可能」を「見れる」「食べれる」とし、「受身」を「見られる」「食べられる」とすると、意味機能と形式が1対1対応になる。
- (20) 考え方2
日本語の動詞には、そもそも「可能」形と「受身」形が異なるものがすでにある
- a. この本なら、僕でも簡単に読める (可能)
 - b. この本は、たくさんの大学生に読まれている (受身)
- (21) 「ら抜き」現象の二つの機能
- a. 「られ」の意味機能の負担を軽減する
 - b. 日本語の動詞形全体の体系を整える

参考：大津由紀雄(2004)『探検！ことばの世界』（ひつじ書房）

- (22) ここまでのまとめ
- ことばを科学的に研究する
 - 規範的態度は科学的研究の大敵
 - 仮説検証法 (hypothesis testing)
 - ここでの「ことば」とは、一人ひとりの頭の中にある仕組み・言語能力
- (23) いつから？

2. 新しい言語科学の誕生

- (24) 認知革命 (Cognitive Revolution) : 1950's
いわゆる生成文法 (generative grammar) という言語に対する新しい「研究態度」「研究方法」の誕生
- (25) Generative grammar arose in the context of what is often called “the cognitive revolution” of the 1950s, and was an important factor in its development. **...there was an important change of perspective: from the study of behavior and its products (such as texts), to the inner mechanisms that enter into human thought and action.** The cognitive perspective regards behavior and its products not as the object of inquiry, but as data that may provide evidence about the inner mechanisms of mind and the ways these mechanisms operate in executing actions and interpreting experience.
(Chomsky 2004. “Language and Mind: Current Thoughts on Ancient Problems,” in Jenkins (ed.) *Variation and Universals in Biolinguistics*. Elsevier Press, pp.381-382)
- (26) a. E-言語 (表に出てくる言語現象)
b. I-言語 (「E 言語」を支えている人間の脳内の言語システム)
- (27) 言語研究の対象は「I 言語」: 「E 言語」はそのためのデータ・資料
- (28) 文化や社会学の一部ではなく、生物学 (biology) の一部としての言語研究
Chomsky (2000) *New Horizons in the Study of Language and Mind*, CUP
- (29) 三つの基本的問い
- 言語知識とはどのようなものか？
(日本語ができるというのは何を知っていること?)
 - 言語知識 (自分の母語) はどのように獲得されるのか？
 - 言語知識はどのように使用されるのか？
(Chomsky 1986: 3. *Knowledge of Language, Its Nature, Origin, and Use*. Praeger Publishers.)

3. 対象を客体化する (科学の方法) : ちょっと練習

- (30) 自分の言語知識・言語能力を客観的に見る訓練
- (31) 「方言」と「共通語」(東京方言)
(水原明人 1994.『江戸語・東京語・標準語』(講談社現代新書))
- (32) 北海道方言の発見
- (33) **small exercise**
次の二つの「書けない」は、よく見ると意味機能が少し異なります。
どのように違う？
- a. あれ、インクが切れたのかな。このボールペン、書けないよ。
b. 太郎君はまだ、ローマ字で自分の名前が書けないよ。
- (34) a. 状況可能 (自発)・状況不可能
b. 能力可能・能力不可能
- (35) 北海道方言
a. このボールペン、書かさないよ。
b. * 太郎君はまだ、ローマ字で自分の名前が書かさないよ。
- (36) 東京方言では「状況可能」と「能力可能」が同じ形式 (形では区別できない)。
北海道方言では「状況可能」と「能力可能」を別の形で区別できる。
(Cf. 関西弁「よう食べん」vs.「食べられへん」)
(山下好孝 2004.『関西弁講義』(講談社) pp.104-108)
- (37) 規範的な態度(「東京方言は“正しい”」「他の方言はなまっている・不完全な言語」)
でいると、方言の持つ体系 (system) を見落とすことになる
- (39) 言語に優劣はない
どの言語もどの方言も、それぞれ独自の豊かな体系を持っている
- (40) どの言語にも働いている共通の原理や規則もある
言語間の体系的な違いは、どう説明する (子どもはどのようにして違いを獲得?)

4. 今日のまとめ

- (41) a. **Introduction** : 言語を科学的に研究するとは
b. 新しい言語科学の誕生
c. 対象を客体化する : ちょっと練習

HW1

次回授業開始時に **pre-class work** をするので、今週の内容を復習しておいて。